（茅風17号より再録）

◆かんじきづくり　　武井民雄

2月18、19日にわたってのフィールドスタディーと講座に参加させていただきました。会員のU御夫妻と私、同僚のH女史と連れ立って、月夜野インターをおりて山道を登っていくと、次第に路肩の雪が目立つこと。遊山館に着くころには、雪の壁が頭上はるか、大雪だるま「藤原フッちゃん」が出迎えてくれました。

「・・・が減っては戦は出来ぬ」とまず、カレーうどん、カレー雑炊で、腹ごしらえ。そうこうしているうちに、阿部惣一郎さんが、軽トラになにやら山積みにして到着。秋の茅刈でお世話になったお顔に、懐かしさがこみ上げてきました。

（次ページへ）

惣一郎さんが荷台から降ろすもの見ると、⊂⊃の形の枠、細長い板、縄、針金、工具さまざま。

ひとしきり邂逅を楽しんでいると、参加者の皆さんが続々到着、また懐かしい面々。塾長の清水さんの呼びかけで、30 分後にかんじき作りに入ると言うことで、思い思いに昼食をとりました。

まず、塾長のあいさつ、続いて惣一郎さんのカンジキの使う目的の説明、「これを履いて山の中に入っていくんサー」と炭焼きや狩猟のために、山に入るお話に納得。なるほどカンジキを履かなければ、雪に埋まってしまうでしょう。実は私、現地に着いて喜び勇んで、雪の中に足を踏み入れたとたん、膝までズッポリ・・・。

さて、材料の説明、⊂⊃型の枠は、「ジシャ＝アブラチャン」といクスノキ科の落葉樹木のもので、惣一郎さん曰く、「その辺にいくらでもあるけど、カンジキの材料にできるのは少ないんサー」。適当な太さで曲がっていなく節が無いものとなると揃えるのが大変だ、と言うことです。さらに、⊂⊃字型に矯めるとなると・・・。一同、そのご苦労に感服。

カンジキの構造は、大きめの⊂に小さめの⊃を固定して楕円形をつくるもの。⊂⊃の重なり合った２箇所に「爪」はめ込んで、針金で三～四重に巻き上げて固定します。次に、靴を乗せる足場作り。楕円形の前後二ヶ所、左右に縄を何重にも渡して、さらに巻き上げて「つり橋」の様にします。ここまでくると完成です。

はじめの作業は「爪」作り。これも自然の「イタヤカエデ」から板まで製材したものです。ノコギリの音とノミを打つ槌音が入り混じり工事現場の様。惣一郎さんは教えを乞う参加者に引っ張りだこです。「爪」は上に突き出す２ｃｍ、枠の太さの寸法、雪に突き刺さる部分４センチと鉛筆で墨をつけ、枠の太さの部分がはまるようにノミでくぼみを刻みます。これを両足２本ずつ計４個作ります。

私はノミで刻みを入れる作業に没頭、金槌でノミを打っていると時間が経つのも忘れます。枠の丸みにあわせて刻みを入れようと悪戦苦闘しているうちに、其処此処で縄を巻く作業に取り掛かる参加者。気がつくと時刻は５時近く、気持ちは焦りながらも、枠に爪をはめ込み、針金で巻き上げるところまで出来ました。多くの皆さんは、完成していました。

ここで１日目の実習は終わり、夕食には初参加の大前さんの手作りビールをご馳走になり、ビール作りの苦労話を聞かせていただきました。食事の後は、有志が集まり春の野焼きの相談になりました。例年にない大雪のせいで、時期が２週間程度遅れるだろう、と地元の雲越さん。延焼を防ぐために、雪の山で防火帯をつくらなければならなく、ブルドーザーで雪を寄せて茅を露出させて野焼きをすることになります。去年、一昨年と防火帯作りに骨を折られた地元の皆さんに頭が下がる思いでした。さらに、野焼きの将来を見通した話し合いもされて、会議は終了しました。

２日目も青空が広がり、カンジキハイキングの絶好の日和。車に分乗して、塾が管理する入会（いりあい）の山に向いました。山に着くと一面の白銀、ここで茅刈をしたとは思えない別世界です。それぞれ、自作のカンジキを縄でくくりつけて、雪原に踏み出します。駆け出す人、おそるおそる歩く人など様々。ちなみに、私は惣一郎さんのカンジキを借りました。雪に足をとられることもなく、爪が雪を噛み傾斜も楽に登れました。途中、ウサギの足跡を発見、山に上がると眺望が開け、山見となりました。惣一郎さんから、「あれが谷川岳、遠くに見えるのが新潟国境」と説明を受けつつ、間近に見る谷川に圧倒されました。

さらに山を登り、寝そべって尻スキーに興じ子供に帰った様です。十郎太沢？の源流に向う途中、テンの足跡も発見、テンテンと歩んだ様子でした。

時間となり、スノーハイクは終了、山を下って現地事務所の雪降ろしの作業に一汗流し、昼食をとって散会となりました。

あっと言う間の２日間でしたが、とても中身の濃い時間を過ごすことが出来ました。阿部惣一郎さんと塾の皆さんのご苦労に感謝申し上げます。

フィールドは雪が深く、一面真っ白でした。子供連れということもあり、手作りのカンジキを履いての散策は、急斜面には行けず残念でした。皆さんはおそらく湧き水の出ている所まで見にいかれたのでしょうが。カンジキを雪の中で初めて履いた感想としては、雪上を楽に歩くことが出来ることと、靴底にある木のくいのようなものがスパイク代わりになっていて、よく出来ているものだと感心したことです。せっかく作った貴重なものなので、今回きりではなく大切にしながら機会があればまた活用したいと思っています。

の木の枝（それが竹だったかどうかは定かではありませんが・・・）をストロー代わりにして水を飲んだりしたことが鮮明に憶いだされます。３０ｃｍくらいの幅の水の流れているところにはオオサンショウオがいたり、ときには蛇も・・・・。

そんな自然の中で育ったおかげか、今回藤原のフィールドを素直に受け入れることが出来ました。地元の人の話では若い人が出て行ってしまうとのことでしたが、若い人はふるさとがあって都会に行くのであって、村を捨てているわけではなく、村に何かがあればみんな戻ってくるのではないかと思います。森林塾青水と地元の人とのかかわり方は、あくまでも地元優先の付き合い方で、それも素晴らしいことだと思いますし、必要なことだと思います。

いろいろ感想を書かせていただきましたが、きっかけを作ってくださった清水さんに感謝するとともに、機会がありましたらまた参加させて頂きたいと思います。

追記　インターネットの時代。なんでもわかる世の中。カンジキをじかに作ったり、雪のフィールドに行ったりと、一見時間がもったいないと思われがちな今、実はそんな風な時間の過ごし方が一番大切なことではなかろうか、と思っているひとりです。

（茅風17号より再録）

◆「雪の夜噺～～～カンジキ、野焼き」　*川端英雄*

「今年の野焼きは去年より２週間おくれだなあ」万枝さんが口火を切る。
今夜の顔ぶれは目新しい人が多い。２歳、５歳の子どもさんも参加の婦唱夫随（かな？）鈴木一家、武居さん、高橋さん、関岡さん、新川さん、爺（じい）ビール差し入れの大前さんなど。
そんなこともあってフィールドのおさらいをサラッと。雪国での野焼きは珍しいこと、しじみ蝶を筆頭に生物の多様性が見られること、かつては今の１０倍の面積の入会地だったこと、綿雪とザラメ雪の違いなど・・・。

話は核心へ進む。１月までに降った根雪は遅くまで溶けないのか、温暖の日が続けば一気に溶けだすのか、雪の溶け具合で野焼きの日が決まる。久しぶりの豪雪にさすが地元の古老にも答えはすぐには出せないようだ。
「雪に左右されないように、この際、防火帯を作ったらどうだ？」防火帯の位置や幅についてはすぐに地元の意見もまとまるが、完璧に防火の役目が果たせるかは自信無げ。やはり、雪の壁の方が防火にはきわめつきのようだ。町の優秀な行政マン木村さんから、森林法に準じて作られた骨董品ものの防火条例の紹介がある。古くてもこの町の条例があったから、野焼きが始められた様子もうかがえる。

結論が出にくい中で話はフィールドの森林化の状況や、野焼きの効用、ススキの品質などをさまよう。ここで新発見。今までの認識では、細くてまっすぐ伸びているのが良質なススキだったが、今夜の話では太くて揃っている２ｍくらいのが良質だと。細いのは芽だしのときに腐りやすい。また、野焼きをすると、雑木などに取られていた養分がススキに充分提供され良質なものができるが、良い芽になるには時間がかかる。藤蔓などが火に焼けて鎌の通りがよくなり、カヤ刈りしやすくなる効用もあるなど、結論を出すまでしばしのティータイム。そういえば今夜はまったくのノンアルコール。コモンズにとって歴史的な一夜だ。

野焼きの盛り上げ方などにも触れた後に出した結論は、「野焼き実施予定日の２週間前に結論を出そう」。神様しか知らないことに、いま結論を出すのは早いということ。かな？

テレコになってしもうたが、今回の講座のメインテーマは「カンジキづくり」。
藤原に到着早々の昼食を終えて、新装成った「遊山館」の会議室でところ狭しと１０余名が思い思いにひろがる。
１５台のカンジキの材料となるアブラチャンの採取に始まる、小（こ）１年の惣一郎さんの準備の苦労なんてことはすっかり忘れ、皆さん童心に帰ってギーコギーコ、トントン。「生きてるって、こういうことなんだあ！」と思わせる風景。

後日のために聞き書きしたレシピを残します。

1．まず全体像をイメージしてみる。
径の異なるＵ字型のわっか２本を長円形におく。Ｕ字型が重なる部分に爪を立て、爪の前後を針金で固定する。爪をはさんで固定された長円形のほぼ中央部、爪の両側に長円形を横断してビニール紐を張り渡す。ここに足を乗せ、Ｕ字型と長靴をやはりビニール紐で固定すれば雪原を軽やかに歩ける。（分かるかなあ？）

2．秋あるいは春先に山の斜面に生育しているアブラチャン（エンジュ、ミズナラ、コマエビ、クロモジも材料になるそうだ）を採取、湯またはたき火で樹皮をとり、墨付けし、曲げ、乾燥させ、ユタの煮汁で染めるとＵ字型のわっかが出来上がる。
口で言うのは簡単だが、かなりの手間隙（てまひま）がかかっている。墨付け、曲げる型枠は惣一郎さん考案の独特の道具。また、材料そのものも近年探しづらい由。

3．惣一郎さんが準備してくれた、径の異なる２本のＵ字型を手許におく。

4．径が大きく、前方がやや上方に曲げられているＵ字型を前方に、小ぶりでまっすぐなＵ字型を後方に、それぞれ開口部を相対させて置く。この２本のＵ字型を長円形に組み合わせるが、内側になる小ぶりでまっすぐなＵ字型の後方がやや長いほうが歩きやすいので、適当な位置に組み合わせる。このとき、５、で述べる針金が巻きつきやすく、移動しにくいようにＵ字型にレ型の切込みを入れる。外側のＵ字型には外側に、内側のＵ字型には内側に各２箇所ずつ。それぞれ、レ型の垂直部分を先端側にかつ先端から２ｃｍ程度離れた位置に切り込みを入れる。

5．６、で述べる爪とＵ字型がしっくり組み合わせ出来るように、外側になるＵ字型の内側に、５ミリ程度の浅さとやはり４、で述べる板の横径（3ｃｍ程度）に合わせた長さで切込みを入れる。このかみ合わせがしっくりいかないと、雪原を歩いたときにがたつく原因となる。

6．イタヤカエデ（ミネバリがもっとも強い、ホウも可。秋、春先に切り出して乾燥させておく）で作った８ｃｍ×３ｃｍ×１ｃｍ程度の大きさの爪といわれる板の平面部分に、U字型のアブラチャンがすっぽりはめ込みできるような浅い、５ミリ程度の切込みを入れる。５、のU字型の切り込みと爪の切り込みがしっかり固定して、雪上でのスリップを防止する。雪を咬みこむ方の爪の先端の角ばった部分を削り落とし、滑らかに雪を咬みこめるようにしておくのがコツ。
以上までの材料はもちろん惣一郎さん任せとなる。

7．長円形に組み合わせたU字型に、２本の爪をセットする。４、で述べたU字型の重なったレ型の切り込みに針金を巻きつけて２本のU字型と爪を締め付ける。巻き数は３～４回。ペンチで針金を締め上げ、締め付ける。このとき、外側の大きなU字型の前方部分がを上に向くようにセットする。カンジキの先端部分が上方に向いていれば雪を押し付ける形となって、先端部分が雪の中に突っ込まないようにするためだ。巻き終わった針金の先端部分はU字型の下方になるようにしておけば、針先に引っ掛けて怪我をすることが避けられる。

8．組み合わされた２本のU字型の中間に、ビニール製のひもを張り渡す。足を乗せるため。（ひもの張り方およびU字型と長靴の結わえ方は、私が製作にあせっていたため惣一郎さんの話をろくすっぽ聞いておらず、記録がありません。いづれ７、までの部分も含め惣一郎さんの校閲を頂いてからあらためて発表したいと考えています。）

いやあ、レシピを作るってことは疲れますね。自分の作った（実は３／４は惣一郎さんに手直ししてもらったのですが）カンジキはいま、自分の部屋の壁にかかっています。立派なインテリアのひとつです。もちろんこのカンジキで、雪原を鈴木さんのお子さんと手をつないで歩きました。立派に役にたちました。

終わり